



Title	近代日本語書記における片仮名の研究
Author(s)	深澤, 愛
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/46572">http://hdl.handle.net/11094/46572</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	深澤 愛
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19950 号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	近代日本語書記における片仮名の研究
論文審査委員	(主査) 助教授 岡島 昭浩  (副査) 教授 蜂矢 真郷 教授 金水 敏

#### 論文内容の要旨

本論文は、近代日本語における片仮名の機能について考察したものである。本論文では明治時代を片仮名の機能が大きく変化した時期と捉える。すなわち、片仮名が漢字に従属していたものであったところから、現在のような、平仮名に対して漢字と交換可能な文字となった変化である。本論文はその変化のあとを位置づけるために、明治中期から昭和初期にかけて広く読まれた博文館の雑誌『太陽』、および、『太陽』に吸収されることになった雑誌群（「前誌群」と称される）を主資料として、外来語（外国人名・地名を含む）の表記を中心に丹念に考察しているものである（400字詰換算約500枚）。

第一章と第二章は、本論文の問題提起ならびに研究方法・研究資料の提示で、第三章で、漢字・平仮名・片仮名の中から字種を選択し、また符号を付すか否かを選択する、「表記選択」という概念が、外国地名・人名が、漢字でも片仮名でも平仮名でも表記されえた時代の具体的な例とともに説明される。

第四章では、「前誌群」を資料に、漢字片仮名交じり文における片仮名・平仮名と、漢字平仮名交じり文における片仮名・平仮名を比較考察したもので、片仮名文字列は、文字列単独では外来語（自立語）を表記するための文字列たり得ず、傍線や鈎括弧など符号を付すことが必要であった時期があったことが明らかにされる。

第五章では、漢字片仮名交じり文が消え、漢字平仮名交じり文だけになった、『太陽』を調査し、漢字平仮名交じり文における片仮名文字列が、符号なしでも自立語を表記できるようになってゆく様子を追っている。

第六章・第七章では、文体と表記選択との関わりに注目している。まず第六章で、『太陽』創刊号における文体と表記選択の考察を行い、そこでの分析を基に第七章では、片仮名が現代語のように外来語を担う文字体系としての位置を獲得するまでを追ったもので、出現頻度の高い外国地名人名が、漢字表記から片仮名表記へと変わってゆく様子を、速記文・口語文体との関わりで捉えようとしている。

第八章は全体のまとめとすべき章であるが、そこから発展して、片仮名文字列の特質変化、外来語表記における漢字表記から片仮名表記への移行、片仮名表記の受け入れ易さ等について、理論的な説明を試みている。漢字片仮名交じり文の衰退と、漢字平仮名交じり文における片仮名の位置の獲得を、あわせ論じている。

## 論文審査の結果の要旨

仮名の研究、また片仮名の研究といった場合、一つ一つの仮名の研究や現代表記における仮名の研究、あるいは特定の時代における仮名の研究、また仮名遣いの研究といったような研究は多いが、体系としての片仮名の変遷を正面から取り上げた論考は、そう多くない。本論文は、そうした研究状況の中で、膨大な明治資料の中から、総合雑誌に着目し、『太陽』を年代に沿って追うことにより、近代における片仮名の位置の変化を、資料の丹念な調査によって分析し、見極めようとしているものである。

第四章での、片仮名文字列は文字列単独では外来語を表記するための文字列たり得なかった時期があったとの指摘、漢字片仮名交じり文における片仮名文字列のみならず、漢字平仮名交じり文における片仮名文字列でも同様であるという指摘は、現代とも違い、当時の漢字片仮名交じり文における平仮名文字列とも違う様相を示すものであり、明治にあっても、片仮名が漢字に従属する性質をもったものであった時期のあったことを示す貴重な指摘である。第八章は、片仮名という文字の体系の変遷を考察したまとめであるが、日本語表記の中の漢字・平仮名・片仮名の位置づけという大きなテーマに取り組んでいるものである。ここでは近代日本語表記の中の片仮名の位置づけをし、これが現代日本語表記における片仮名の位置づけへ、どのように変化し得たのかを考察し、まだ問題は残るものの、その変化の道筋を示している。

一方、惜しまれる点もある。漢字平仮名交じり文の中に片仮名が入り込んできてその要素となってゆく過程は示してあっても、漢字平仮名交じり文における漢字と平仮名の関係を十分に考察しないままなされていることが、その一つである。また、近代における外来語そのものの位置づけをなさずに外来語表記を考えようとした点、用語などに曖昧なものがある点は、今後、考察し直す必要があるであろう。さらに、資料が『太陽』など博文館のものに限られている点は、たとえこれが広く流布したものであっても、多様な明治の言語資料の、ほんの一部でしかないために、この論文の示した結果が、「近代日本語書記」をどれほど正しく捉えているのか不安が残り、他の資料を使った検証が今後望まれるところである。

これらの問題点がありはするものの、本論文は、近代日本語表記史の中で、片仮名の位置づけが重要な課題であることを示し、そしてそれを綿密な調査によって跡づけたという点において、評価できるものとなっている。

2006年2月10日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。

以上のようなので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。